

## 大阪にもある「満蒙開拓団」碑

中務 武志

この夏公開された映画『嗚呼 満蒙開拓団』は、各地で大きな反響を呼びました。開拓団で辛酸をなめた人たちに取材した、羽田澄子監督による記録映画で、2008年キネマ旬報文化映画ベストテン第1位などを得ています。

満蒙開拓団とは、1931年の満州事変、1932年の「満州国」建国以後、日本の重要国策として中国大陸東北部、内蒙古に送りこまれた農業移民のこと。

1945年の敗戦までに約27万人が移住しました。昭和恐慌によって困窮した農民を救済するとともに、日本人人口を増やし、国境を接するソ連軍に備える狙いもありました。

開拓民たちは各地に日本人村をつくり、小学校も設置、きびしい気候風土と戦いながら少しずつ成果を揚げていきました。ただその土地の多くは、中国人の耕地を安く半強制的に買い上げたもので、中国人の恨みを買うことになりました。

1945年8月9日のソ連参戦で開拓団の運命は暗転、ソ連軍の暴虐と中国人の蜂起にさらされました。悲惨を極めた逃避行のなかで多くの命が失われ、その数約7万人といわれます。またやむなく親に手放され、あるいは親を失って中国人に助けられた子どもたちも多かったです。中国残留孤児といわれるのがこの人たちです。

いま長野県で「満蒙開拓平和記念館」建設計画が進められているように、開拓団の多くが長野や東北地方の出身でしたが、大阪からの開拓団もありました。入植者は1917人。私が親しくしている人もその一人で、一家とともに昇平大阪開拓団に加わりました。彼にもらった記録のコピーによると、昇平に入植した1036人のうち、実に386人が引揚げの途中で命を落としています。その過去帳には連日数人から10数人が亡くなったと記され、幼児の名も多く、見るたびに肅然とした思いがします。

大阪市の四天王寺西門を少し下った、「お骨仏」で知られる一心寺。本堂と向かい合った一角に大きな「満州開拓物故者之碑」が建っています。辛うじて帰国した開拓民たちが生活再建のために結成した「大阪自興会」が1960年に建立したものです。自興会では毎年8月にこの碑の前で追悼の法要を行っているそうです。私も訪れるたびに線香をあげ、手を合わせています。



満州開拓物故者之碑

(大阪・天王寺区、一心寺内)

(なかつかさ・たけし：1936年生まれ。大阪府出身。若い頃から中国に関心を持ち、地元大阪府・阪南市の日中友好協会の設立(1991年)に参画。現在、NPO法人大阪府日中友好協会副理事長並びに大阪府阪南市日本中国友好協会副会長兼理事長)

注：この原稿は、阪南市日本中国友好協会の会報「星星」(月刊、09年10月発行)に掲載されたものです。